

宮日報道と読者委員会 第72回会合

政治参加の機運醸成を

候補違い紹介面白い

衆院選

宮崎日日新聞社の報道の在り方を考える「宮日報道と読者委員会」（委員長・水永正憲延岡市キャリア教育支援センター長、3人）の第72回会合は3月24日、宮崎市の宮日会館であった。2月にあつた衆院選を巡る報道や、年間企画「気候危機（クライシス）」について意見を交わした。

（司会 編集局編集総務兼統合編集長・小川祐司）

まず、衆院選の振り返り、議席を獲得した。今回は高市首相が高い支持率を有馬委員 自民党が単独として突然の解散総選挙を以て3分の2を超える316 仕掛けた。消費減税を自民

も打ち出すなどした争点ぶしと有効なSNS戦略、また思わぬ野党第一党の戦略ミスや野党乱立も重なり、歴史的圧勝となった。超短期決戦の中で限りの選挙報道をしたつもりだが、全体を振り返り、超短期決戦の中で限りの選挙報道をした

き読み応えがあつた。ただ、課題を解決する政策について、候補者や政党がどんな主張をしているのか違いが理解しにくかった。有馬委員 今回は「高市人気」で政策論争が深まらず、多党化で政策の比較も難しかった。そんな中、候補者に行つた「100問アンケート」の（テーマを絞つてスタンスの違いを紹介する）コンパクトな記事が分かりやすかつた。「責任ある積極財政」への評価が自民候補の中でも割れるなど面白かつた。こうした記事をどんどん出すべきだ。伊達委員 社説で高市首相の解散手法などを深掘りしてもらったのは非常に良かった。選挙は争点があつて議論が尽くされ、有権者に投げかけるというプロセ

出席委員

委員長・延岡市キャリア教育支援センター長
水永 正憲さん

宮崎公立大名誉教授
有馬 晋作さん

宮崎大理事補佐
伊達 紫さん



水永正憲委員長



有馬晋作委員



伊達紫委員

場から」で、コメ生産や保育士不足など幅広い地域の課題について生の声を取り上げ、本県の課題が明確になった。全国で自民が圧勝したにもかかわらず、（宮崎1、2区で）敗れたことは、「激戦の後で」で背景や真相を掘り下げた。記者が日頃から集めている豊富な情報を元に、読者が知らない視点を提供していただ

から政治を見る、参加する機運の醸成を図るべきだ。選挙期間に限らず、国会議員に中東情勢の問題など重要事項について意見を聞いてみるのも良い。政治への関心をどう高め、SNSの規制をどうするか問題提起していくことが報道の役割だと感じる。

水永委員長 各政党の政策の違いや実現可能性など、読者が客観的に評価でき、視点を深められるような情報の提供を模索してほしい。SNSに関しては広告料を稼ぐための切り抜き動画が選挙を左右する事態は変えないといけない。また、新聞、テレビとSNSが融合する形になってきた以上、SNSに対してこちらから正しい情報を提供していく視点もあっていい。

森編集局長 SNSが影響を及ぼすような選挙がこれからはますます多くなっていくと思う。今後控える知事選がそういった選挙になるかもしれないという状況の中で、選挙報道も客観的に評価しやすい情報提供など新しいこともやらなければならないと考えている。

本社側出席者

社長・見山輝朗▽編集局長兼論説委員長・森耕一郎▽編集総務兼統合編集長・小川祐司▽編集局次長兼報道部長・黒木裕司▽経済部長・樋口由香▽生活文化部長・川路善彦▽写真映像部長・猪八重俊樹▽整理部長・足立希▽読者室長・黒木友貴▽報道部編集委員・田亨一▽報道部次長・海原斉▽報道部員・成田和実▽同・後藤育子（肩書省略）

災害面問題提起して

企画「気候危機」

1月から年間企画「気候危機（クライシス）」をスタートし、第1部では暑さとコメ作り、第2部では海水温の上昇と漁業について、影響をリポートした。

伊達委員 第1部ではヒノヒカリの開発とブランド化の努力と新品種への展開が分かつた。気温やコメの品質などの変化について、農家や漁師を支える県の試験場の思いも伝わった。

有馬委員 暑さに強い新たな品種ができて消費者に受け入れられるかという課題や、変温動物の魚にとって海水温1度超の変化は人間では8度に相当することなど、勉強になった。より読者に読んでもらうために、宮日でも新聞に分かりやすく書いたり、Q&A形式を掲載したりする工夫も必要ではないか。

第3部では中山間地における気候変動の影響に迫る予定。今後シリーズをどう展開していくべきか。

水永委員長 熱中症や感染症など生活や健康への影響、線状降水帯の発生などの災害面について、専門家の意見を交え問題提起して



衆院選報道などをテーマに議論した「宮日報道と読者委員会」3月24日午後、宮崎市・宮日会館

ほしい。また、世界ではどんな問題が起きていて、どういう課題解決に向けた取り組みがあるのかまでである、より理解を深められると思う。

有馬委員 暑い期間が長くなると暮らしにどんな影響があり、どうすれば生活しやすいのか、などの記事があれば、読者はより興味を持つてくれると思う。特集という形でもいいので、まとめてみてほしい。

伊達委員 大雨による土砂崩れで地域が孤立化したインフラがダメージを受けたりする中山間地こそ、気候危機の影響を直接受けている。備えの重要性などをあらかじめ啓発できるような展開を期待したい。

記者コラム 報道部・成田和実

「環境を守る」は地域を守ること

近年の夏は暑さが厳しい上に、暑い期間が長くなっている。多くの県民がこのことを肌で感じているだろう。元日付より開始した年間企画「気候危機（クライシス）」の第1部「岐路に立つ「コメ作り」」を担当し、その影響を目的にしている。

稲の出穂期に高温が続くとコメが白く濁ってしまい、歩留まりが低下し市場価値も下がる。直接的に影響するのは農家の手取りだが、消費者も無関係ではない。コメが品薄となり価格が高騰した「令和の米騒動」は、2023年の猛暑が全国的なコメの品質低下を招いたことが一因とされる。

生産現場は培った技術をフル動員して暑さに立ち向かい、県総合農業試験場は暑さに強い品種の開発を続けている。本県でコメ作りが続けられる環境を守ることが、地域を守ることに同義であると強く感じた。「宮日報道と読者委員会」では、読者がより自分事として考えられるよう、暮らしに密着した記事も求められた。今後も続く連載の中で、工夫を凝らしたい。